石炭事業の開設（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

鈴木商店は前記の通り砂糖と樟脳の関係から発展した同族会社であったが、日露戦争を契機として開発の手を拡げ、神戸製鋼所の鉄鋼、機械、大里の精糖会社（大里製糖所）及製粉会社（大里製粉所）及樟脳、薄荷の輸出等々、日露戦争の戦後の好況に依り異常なる進展をした。

然し、金子直吉翁の事業に対する情熱は益々旺盛となり、世界を市場とする貿易に対し資金と人材を投入し、早くからロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコ、爪哇（ジャワ）、香港、上海、満州（ハルビン）、朝鮮（京城其他全道）などに支店及出張所を設け、世界各国を相手に各種商品の取引に集中した。

台湾では日清戦争後、直ちに樟脳の開発に着手をした。これを基盤として製糖会社及其他の事後に及んでおった。幸に各事業共国家の発展と共に順調に充実していった。

そして、これ等の組織が充実した所に第一次欧州大戦を迎えたので、潜龍の昇天するが如く、いよいよ三井、三菱と肩を並べるが如き處迄発展したのである。

当時樺太でも日本領有後、鈴木商店は同島のツンドラ採取の権利を得て大関雄只氏其他が実地調査に赴き、開発に着手しておる。当時の調査報告書を小生は拝見したことがある。

（昭和 40.2.15 記）

鈴木商店では大里精糖所と大里製粉所を売却した巨大利益、資本を握った以後、貿易の発展に力を入れると共に、工業生産、即ち煙突を立てる工場の新設に力を注ぐ事になった。即ち、帝人、クロード窒素、亜鉛製錬、酒精工業、ビール会社、ハリマ造船、帝国汽船、毛織会社、油脂工業、水力電気等々で、直営、関係会社などを合計すると数十社に及んだものである。

以上の如き発展振りであったが、独り鉱山関係の事業のみは其の性質が不安定要素が高い為に大正初頭頃迄は見送られておった。然し、鉱物資源関係及エネルギー資源は産業界の主要な分野を占める事業であり、且つ関係会社で使用する燃炭のみにても年間数十万屯に達することになったし、銅、亜鉛、硫化鉄など自家使用原料を要する必要を認めることになった為に、遂に鉱山部を設置して開発を行ふことになった。

（石炭部の着手）
大正二年頃、（鈴木商店の）下関支店に於て、初めて石炭部を設けた。
これは石炭が当時関門・若松地方が市場の中心であった関係もあり、且つ下関支店長の西岡貞太郎氏が石炭に希望を持っておったので、下関支店に於て石炭部が最初に開かれたわけである。

（昭和 40.2.17 記）

他の全ての事業が（鈴木商店の）神戸本店中心に発令せられておったが、石炭に関する生産・販売の計画の中心は当時下関支店石炭部であった。然し、投資其他の大方針は神戸本店の重役室から出ておることは勿論のことである。

石炭に関する知識や経験を持っておるものが鈴木にはおらなかったので、門司の石炭商・高階商店に永年勤めておった大庭挽太郎氏が実際の売買に当った。その上に石炭部主任として石田亀一氏が坐っており、支店長の西岡貞太郎氏は石田氏の上におって相談を受ける訳である。

私が大里製粉所の火災事故處理を終へて石炭部へ転勤して来たのは大正三年か四年頃だったから、二十二才か二十三才位の時だった。

今迄に石炭に対しては何の知識も経験も無いから、毎日門司や若松へ通って大庭さんから石炭の品質、鑑定、買入れ、受渡し、工場納入、汽船の雇入れ、積込などから焚料炭の売込み等々凡て、いろはから教へて貰うのである。

炭坑の模様など時に鉱山へ行って坑内に入り、採炭現場なども見学した。九州炭と一口に云っても筑豊炭もあり、粕谷炭、今宿、唐津、長崎、佐世保などがあり、筑後には大牟田三池がある。又、山口県には宇部炭がある。

品質上では一等、二等、三等及ボタがあり、ネバリ炭、サエモノ炭など産地によって全部ことなる。これなど一通り覚えて仕舞迄には三年位は充分にかかる。幸ひ自分も石炭に興味があったので、熱心に研究してやや石炭の事情に通じることが出来た。

その頃、大正三、四年ごろから突発した欧州大戦の軍需景気が石炭界にも大きく押し寄せて来たのだ。（昭和 40.2.22 記）

米屋のおやじが一握りの米をみてその産地を適確に云当てるのと同様、石炭の一塊をみて、その産地及発熱量が凡そ何千カロリーであって、その石炭は冴物（サエモノ）であるか、粘りであるか、コークスの原料に適当するか否か、又灰分が凡そ何%あるか、こんな事を石炭を見ただけで直ちに判断が出来る様でなくては一人前の石炭屋とは云へぬのである。

こんな事は非常に六ヶ敷い事である様だが、凡ての商品のエキスパートは皆同様な腕前を持っておる。無論こんなことは学校では習得出来ぬことで、実地の経験が如何に大切であるか、又偉大なことであるかを知ることが出来る。

米屋のおやじはくらやみで米を握ってもその品種と産地を適中さすし、原綿のエキスパートは一握りの綿を取って世界中の産地を識別するのである。私が幸ひ、石炭の仕事に関係した以上右の如き領域に達したいと努力したので、少しはわかる様になった。

（大戦の初期の不況）
欧州大戦は日本の産業界に革命をきたす程の好景気をもたらしたのであるが、1914 年（大正 3 年）開戦当時は逆に非常に不況だった。一時的に対外取引のチツジョが乱れ、石炭の如きは値段が低落したのである。

当時、私が扱った石炭の値段は中級炭の粉炭の如きは荷動（にうごき）が悪く、安いものは毎屯（トン）若松渡し四円だった。又塊炭で五円位である。それでも荷動悪く、貯炭は自然発熱を起して焼ける始末であった。毎屯二円、三円の売りものが出る始末だった。

当時、炭坑から若松迄の鉄道運賃は近い所で一円位、遠い處（ところ）は一円五十銭から二円であったから、炭鉱では無論赤字経営であった。

石炭の取引は会社工場納めが多分にしめておったので、半年の先物、又ハ向ふ一ヶ年といふ契約もあった。当時、鈴木商店石炭部では自家炭坑が無い時代だったから、各炭坑から長期の買付を行って消費者へ売込んでおった。

戦局が追々（おいおい）発展して長期化し何時（いつ）終戦するかギモンだったので、戦争の局外だった我国へ聯合（れんごう）軍から軍需物資の注文が続々と舞込んで来た。鉄鋼、石炭、船舶、船腹などを先頭とし、あらゆる商品が輸出せられた。

終戦当時迄の輸出超過の手取金が弐拾億弗（にじゅうおくドル）以上もアメリカに預金勘定として残る有様で、日本の円の相場が非常に暴騰した。今から考へると眞に夢ものがたりである。

当時の正確な資料を調べるとわかるだろうが、私が記憶しておる一端にこんなことがある。

そのころの或る日、大正八年の春か夏頃、須磨の一の谷の金子さんのお宅にとめていただいた翌日、お宅から自働車に金子さんや日野さんと同車した時、日野さんが金子さんに車中で、今日の対英為替相場は三十何シルリング（シリング）でありますと報告しておられるのを聴いて神戸の本店へ出勤したことがある。

当時の平価（へいか）は二十シルリングだから、日本の円が五割飛上っておったわけである。対米平価一弗（ドル）に対し、二円だったが、当時は一円五十銭位だったと思ふ。今日は対米一弗が三百六十円とは敗戦の結果とはいえ、何となさけないことではないか。

（石炭部好況に乗る）
大正三、四年頃迄は欧州で大戦があっても我国にあまり響かず不況が続いておったが、六年位から大戦の軍需景気が来襲した。先ず始めに船舶の需要が起り、運賃が昂騰（こうとう）を始めた。

これについで石炭市況が好転した。長期契約で買付けてあった石炭が毎屯(トン)一円位上昇した。売手の炭鉱では非常な打撃である。先ず受渡しが渋り始め、旧契約の安いものを不履行して他の高値の新契約へ流そうとする。炭鉱側と買手側とではたえず受渡しでもめた。

又、石炭は大体得意先の工場渡しの契約が多く、若松から大阪、東京、其他(その た)の目的地迄の運賃が昂騰(こうとう)して売手側は相当不利に陥る訳である。

然し、大局的に全体の景気が好転するので、安い旧契約と新規の高値契約を混合して受渡しを履行することにした。我(わが)石炭部に於ても此(こ)の大戦好況の波を利用して発展拡張する方針をきめ、買収炭のほかに自家採掘を開始した。

第一着手は飯塚の神浦炭鉱（神ノ浦(こう の うら)炭坑）である。採鉱の技術者として八幡製鉄所の元潤野(うる の)所長だった大滝氏を招へいした。幸ひこの炭鉱は好調に出炭したので、次に起業小松炭坑、鴻之巣炭坑、御徳(ご とく)炭坑、上山田炭鉱などと次々に手を拡げていった。

戦局の拡大と共に神戸の本店でもクロードチッソ（クロード式窒素工業）や亜鉛製錬（日本金属)、人絹（帝国人造絹糸)、船舶（播磨造船所、鳥羽造船所等）など石炭の需要が増加するのでそれ等の工場へ次々に石炭を供給するので、自家出炭のほかに毎月拾万屯(トン)位は買炭せねば不足する盛況だった。（昭和 40.2.25 記）

帝国炭業株式会社創立（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

大正七、八、九年の三ヶ年は大戦の好況をうけて日本の産業界は革命的の発展をとげた。
鈴木商店の本店に於てもこの大波に乗って大発展を遂げた。石炭部も益々発展して投資設備も増加したので独立会社を起し、資本金壱千万円の帝国炭業ＫＫとなった。

（下関から若松へ）私は大正七年には（帝国炭業の）若松出張所の所長をしておって、専ら石炭の受渡し及（および）各地向け輸送、船舶の建造、若松の所員約三十名位の首脳者となった。
当時私は二十六才位だった。

石炭の運搬は当時諸外国向けが全体の半分位をしめておったので、機帆船（きはんせん）を雇っておっては運賃及（および）船腹が不安定なので、資金を別に壱百万円投じて被曳船（ひえいせん）約百隻（平均 200 ton 位）、これを曳船（えいせん）する曳ボート約六、七隻を建造することに方針がきまったので、私が主任となって藤井栄治君に経営さして、その上を私が管理することにした。

そして、東京、名古屋、青島など汽船で送炭する地方の大口の汽船運賃が戦争の為に日々昂騰（こうとう）するので、三千屯（トン）クラスの汽船を三、四隻船腹チャーターをして、これを運営して運賃値上りの損失をチェックした。

これらの船舶事業は凡（すべ）て計画に失敗なく、毎年数百万円の利益を収めることが出来た。

（昭和 40.3.14 記）

若松市の新家庭（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

このころは凡（すべ）てが順調に進行して誠に好調であった。
大正八年の春、私は柳田富士松様や大阪の藤田助七様、福永次郎さん、西岡貞太郎さんなどの御紹介などによって、金子直吉さんの弟さんの高知の楠馬（くすま）さんの長女亀尾と結婚する事が決まった。私の数え年二十七才の晩春である。

見合は神戸の柳田富士松様の宅で行はれた。話は順調に進んで、式は神戸布引の料亭で行はれた神式であった。媒酌人は福永次郎さん、うたいは喜多さんといふ老人の方だった。夕方、式が済んで私達は式場から舞子の旅館万亀楼に落ち着いた。

翌日は此処（ここ）を立って、途中岡山の博覧会及〇〇を見物して若松へ戻る事にした。ところが舞子を出立せんとした時若松から電報が来て、石炭のひかれ船（他の船舶に引かれて航行する船）が上阪の途中、岡山沖で暴風の為、数隻同時に沈没したとの急電を受取った。

私は一寸(ちょっと)いやな感じを受けたが、このことを誰にも口外せず、予定のとおり旅行を済ませて若松へ数日後に到着した。（昭和 40.3.14 記）

若松における新家庭は浜五番町の新築の二階建てで、私と家内と女中の三人暮らしで、家は広すぎる位だった。二階は西に向っておって正面には埋立地が沖へ延びておって、家から西方には見晴らしがよくて、玄界灘へ出て行く汽船がよく見へた。埋立地が広いので、ここで麻のロープを造る人々が天気の良い日にはたくさん働きに来た。

風のある日は玄海からふきぬけて来る風が相当きつかった。（此の時から金子姓を唱へることになった。以前は旧姓の淺野姓だった。）

（帝国炭業）若松出張所当時の社員には、

新階直喜（土佐）	老年の人　会計
松村英次（山口）	元〇和〇店員　船航部　渡セメント
一色卓次（伊予）	石炭受渡係
藤井〇二	元外国店舗員　船航部
柴田	石炭経理
元重	石炭受渡主任
長谷川	見習員

以上の外数十名が毎日海岸通の帝国炭業事務所へ出勤した。事務所の前は三井物産若松支店だった。右どなりに三菱や山下汽船があった。

新家庭の家具など、西岡貞太郎夫人が下関で仕入れてわざわざ若松迄送って下さった。
大正九年の三月には約 1 ヶ月の予定で単身で、朝鮮から博多、長崎まで視察旅行をやった。
小生が京城を経て安東縣(けん)（中国遼寧省南東部）を過ぎ、大連に出たのが三月十五日頃だった。

この時は好況の絶頂だったが、博多の大豆の大々的思惑が行はれておって、買方の神戸小寺に対し、売方は鈴木商店大連支店だった。机の上に受渡用の倉荷証券を山と積んであった事を覚へておる。此の戦は結局売方も買方も非常な痛手を受けて共倒れとなった。西川支店長も此の為に失脚する運命となった。

帰途は大連から門司港へ汽船で直帰した。当時大連はフリーポート（自国の関税法を適用せず、外国貨物の自由な出入を認める港）だったので外国品が安いと言ふので私もビクターの蓄音機（手廻し）を一台（￥100.-だった）と外にごたごた買ったようである。
（昭和 40.3.15 記）

若松には約二年位勤務して成績が良かったので、愈々(いよいよ)帝炭（帝国炭業）の本社である下関支店へ転勤することになった。住居は特に優遇せられて、長府の元百十銀行頭取の社宅だった広大

な家を使用することになった。この屋敷は三千坪位あって、前は中国街道でうしろは松原を透して瀬戸内海に面した広い家だった。土蔵もついておって畳敷は百十枚敷けて、平屋ではあるが部屋数は十数室あり、茶室向きの離れ家もあった。

あまり広い家であったので、家内と女の兒（純子、若松生れ）と女中と私では寂しくて困った。用心の為に隣に下関支店の和田さんと云ふ庶務係の人が住むことになり、非常用のベルなどを布設した。（昭和 40.4.7 記）